

「近代」というシナプス

～連鎖する「近代革命」～

シンキング・バーズ

歴史科学研究班

2019 年 4 月 15 日

歴史研究
「近代」というシナプス

確かにそれは、すでに終わったことです。
そのすでに終わったことに、君は何を感じますか？
はるかなる君に、この歴史を捧げます。

目 次

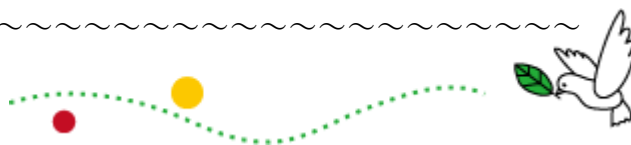
◆はじめに	・・・・・・・・・・ 3
第1章 「近代革命」の捉え方	
◆「近代革命」の世界史的な枠組み	
・領域を区分する	・・・・・・・・・・ 4
・問われているのは「現在」	・・・・・・・・・・ 6
・「近代革命」のアジア的展開	・・・・・・・・・・ 7
・「近代革命」とジェンダー	・・・・・・・・・・ 8
・「近代」期の気象変化	・・・・・・・・・・ 9
【ことばの定義】	
自然	・・・・・・・・・・ 9
革命	・・・・・・・・・・ 10
文明	・・・・・・・・・・ 10

歴史研究

「近代」というシナプス ～連鎖する「近代革命」～

シンキング・バース

歴史科学研究班



歴

史 (History) は人類と共に生まれました。しかし、後世に伝わる記録は限られ、一部の人々を除く歴史は闇の中にあります。歴史学 (Historical science) という学問は、その過去の記録の検証から始まったとされています。日の目を見ていない記録探しや記述内容の信頼性の検証、史料の客観性の多面的な問い直しなど、伝説じみた物語 (Story) に科学 (Science) を取り入れたのが、今日の歴史学と言えます。

20 世紀を代表する歴史学者の一人、アーノルド・トインビー (Arnold Joseph Toynbee 1889 - 1975) は、歴史家の研究領域について、次のように綴っています。「理解可能な歴史研究の単位は、国民国家でもなければ、また (その反対の極限でもある) 人類全体でもなくて、われわれが社会 (ソサイエティ) と呼んでいるところの、ある種の人間集団である」。

また、E・H・カー (Edward Hallett Carr 1892 - 1982) は、「歴史とは何か」という問いに対して、こう書いています。「私たちが自分の生活している社会をどう見るかという更に広汎な問題に対する私たちの答の一部」。そして、「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である (An unending dialogue between the present and the past.)」と記しました。

ここで取り上げる 15 世紀以降の「近代 (Modern times)」は、人類社会が大きく変貌した時代です。私たちが「近代革命の連鎖 (Chaining of Modern Time's Revolution)」と呼ぶその 600 年余りの歴史の流れは、良くも悪くも今日の「文明 (Civilization)」を築きました。連鎖は複雑に絡み合っていますが、その流れと対話する試みが、この論考です。

はじめに

ヨ

ヨーロッパ史の時代区分では、ルネサンス以降を「近代 (Modern times)」とする古典的区分法があります。「近代」以前は、ギリシャ・ローマ時代を中心にした「古代 (Ancient times)」があり、キリスト教教会が強い影響力を持った時代を「中世 (Medieval ages)」としています。歴史を「古代」「中世」「近代」で区分

する伝統的な 3 区分法です。絶対君主の時代も、市民革命の時代も、帝国主義や共産主義の台頭の時代も、「近代」に括られます。

世界の各国史の時代区分は、この区分法を参考にしています。日本史の場合は、古墳時代から平安時代までを「古代」、鎌倉時代から室町時代までを「中世」、江戸時代を「近世」、明治時代以降を「近代」としています。これに縄文・弥生の無文字時代を「原始」、それ以前の石器時代を「先史」と呼んで区分する考え方が、広く普及しています。太平洋

歴史研究

「近代」というシナプス

戦争終了後の「戦後」を、「現代」と切り分ける区分法も親しまれています。日本史の時代区分は、「先史」「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」の7区分で成り立っています。その中で「近代」は、明治維新を欧米の市民革命と対比する歴史観から、西欧化が進展した時代として設定しています。

私たちがここで取り上げる「近代」は、ヨーロッパ史の時代区分が基準です。そのため、日本史上の「近代」とは、約400年の開きが生じます。戦国時代や江戸時代を「近代」とすることになり、一般的な歴史区分とは異なってしまいます。

しかし、日本とヨーロッパとの直接的な接触は、16世紀には始まっていました。世界の動きと連動する文明的接触（Civilization contact）を、一定の密度で体験していたので

す。「近代」は、異なる地域の文明的接触の密度が、基本的には徐々に濃くなって行く時代です。その意味では、日本の戦国時代や江戸時代を、ヨーロッパ史基準の「近代」から切り離すことはできないのです。

「近代文明（Modern civilization）」はヨーロッパに端を発した、と一般的には考えられています。その価値観や制度、科学技術などの世界化が、今日の世界を形作ったとされています。その源泉を探る眼差しは、時には「古代」や「中世」にも注がれています。「近代」は、人類の幸福に貢献した側面と、不幸を生んだ側面を併せ持っています。その歴史の解明は、今の世界を照射するのです。

この論考の目的は、その「近代文明」の連鎖を辿りながら、功罪の二面性に眼差しを注ぐことにあります。

第1章 「近代革命」の捉え方

「近代革命」の 世界史的な枠組み

●領域を区分する

歴

史上の現象は、時代を問わず「連鎖（chaining）」を伴っています。侵略や戦争のような物理的な圧力。その結果生じたヒトの移動。物質の発見や発明に伴う生産や技術の発達。その改良や伝播。政治制度や法体系など統治機構の構築や模倣。思想や宗教、哲学、学問など内面的思考の普及。その批判や融合。音楽や絵画など芸術分野の流行や深化。逸話レベルの情報でさえ、歴史を動かす力になります。

この論考で取り上げる「近代革命（Modern Time's Revolution）」は、15世紀以降の世界

に拡散した多様な領域（fields）の「革命」を指しています。その範囲は、政治、経済、産業、科学技術、文化と広範囲に及びます。各領域は、互いに関わり合い、拡散や収縮を繰り返しながら、歴史の流れを形づくって来ました。その複雑な展開の各時代や各地域の現れ方が、「近代」の諸相（phases）と言えます。

この論考を始めるにあたって、その「近代革命」の枠組み（frame）を定義する必要があります。そのためには、多岐にわたる領域を括る便宜上の区分が必要です。ここでは、その要素に応じて、以下の領域に区分することにしました。各領域は、前時代からの連鎖を含め、互いに密接に関連し、重なり合っています。各領域の主要現象を図式化したのが、表「近代革命の諸相」です。

歴史研究

「近代」というシナプス

① 技術的領域 (Technological field)

「産業革命 (Industrial revolutions)」に代表される技術的な展開を主とする領域です。細部領域は、鉱工業から電子技術に至るまで多岐にわたり、「近代革命」の主要領域です。

② 経済的領域 (Economic field)

「商業革命 (Commercial revolutions)」に代表される金融・財政的な展開を主とする領域です。「資本主義 (Capitalism)」の形成プロセスと言えます。対立軸の「共産主義 (Communism)」を含みます。

③ 政治的領域 (Political field)

「市民革命 (Bourgeois revolutions)」に代表される政治的な展開を主とする領域

です。「立憲主義 (Constitutionalism)」

「議会政治 (Parliamentary politics)」

「民主主義 (Democracy)」 「社会主義 (Socialism)」 「国際政治 (International politics)」 など、理念を含む政治制度が含まれます。

④ 文化的領域 (Cultural field)

宗教、学問、芸術などで、旧価値観が転換する現象が起こった領域です。「ルネサンス (Renaissance)」を皮切りに、「宗教改革 (Reformation)」、地動説以降の「科学革命 (Scientific revolutions)」、人権思想から経済理論に至るまで、多岐にわたります。「近代」の精神文化に、大きな役割を果たしました。

■近代革命の諸相

項 目	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	21世紀
北半球の気温	シュベラー極小期	小氷期	マウンダー極小期	ダントン極小期		温暖化
エネルギー革命			石炭・蒸気		石油・電力	原子力
工業(産業)革命			軽工業	重化学工業		ICT
農業革命			農法改良・品種改良・化学肥料			バイオ
交通革命	大航海時代			蒸気船・鉄道	自動車・飛行機	
医療革命				病原菌予防	新薬・機器	細胞移植
メディア革命	印刷・出版				電信・放送	
ICT革命						インターネット
宇宙革命						衛星通信
商業(流通)革命	新航路交易	商社交易・重商主義・自由貿易		ブロック化	再編 自由化 金融主義	
価格革命	銀インフレ			大恐慌 石油危機 金融バブル		
資本主義			工業化 市場競争 寡占	変動為替 金融資本		
共産主義					国家計画経済	
民主主義革命		英 英	米 仏	全欧	中	
社会主義革命					ソ 中	
領土分割	スペイン・ポルトガル・オランダ		イギリス・フランス	米・ロ・独・日		
独立革命				中南米	アジア・アフリカ	
ルネサンス	人間主義					
宗教改革	聖書主義		理性の崇拝			
科学革命	天動説		万有引力 化学元素 種の起源 相対性理論			
近代思想		市民論 富国論 社会契約説	資本論 実存主義			
東アジアの近代	海洋交易期	相互海禁(鎖国)期	帝国主義期	グローバル期		
中国	明	清	中華民国	中華人民共和国		
朝鮮		李氏王朝	日本	韓国 北朝鮮		
日本	戦国時代	江戸時代	明治	昭和	平成	
沖縄		琉球王朝	日本	米	日本	

歴史研究

「近代」というシナプス

各領域の展開は、単眼単線的ではなく複眼曲線的で、記録の有無にかかわらず「歴史」を動かしました。時間（時代）と空間（場所と環境）、モノ（量と質と作用）の時代的制約を受けながら、「歴史」を形成しました。

●問われているのは「現在」

世 界史的に見た「近代革命の連鎖」は、言うまでもなく現在進行形です。4 領域それぞれに、日常的变化を繰り返しながら、現代社会まで続いています。

その領域ごとの二面性を簡略に示したのが、下表の「近代革命領域の二面性」です。正負の側面は、これ以外にも数多くあり、あくまで目安を示したものです。

① 技術的領域

「新機軸主義（Innovationism）」が、技術開発競争を生み、技術レベルの向上と共に、便益（convenience）や健康な暮らし（healthy life）などに貢献してい

ます。一方、軍事技術の向上、古い技術の衰退や廃棄と、めまぐるしい環境変化を生んでいます。技術装置による殺戮、有害物質の排出などが発生しています。

② 経済的領域

「資本主義（Capitalism）」の発展は、人々を経済的に豊かにしました。「自由主義（Liberalism）」と連動すると、巨万の富みも生まれました。一方、過度の競争や景気の浮沈の結果、経済的な貧富が生じ、都市への人口集中や農山漁村の衰退を招いています。

③ 政治的領域

「民主主義（Democracy）」の浸透は、その法体系で、ヒトとしての権利を保証しました。平等思想を広めることにも貢献しました。一方、ポピュリズムが蔓延するリスクが常にあり、人々の集団的暴走を助長する側面を持っています。

④ 文化的領域

「人間主義（Humanism）」が、人々の

■近代革命領域の二面性

領 域	該当する語	プラス側面	マイナス側面
技術的領域	新機軸主義 (Innovationism)	・ 便利で快適な生活 ・ 安全で安心な生活 ・ スピードの短縮 ・ 楽しみの増大	・ 兵器の高度化 ・ 事故リスク ・ ヒトの疎外 ・ 古い技術の衰退
経済的領域	資本主義 (Capitalism)	・ 経済的な豊かさ ・ 自由競争 ・ 自由貿易 ・ 国力の増大	・ 過度の市場競争 ・ 景気の浮沈 ・ 経済的不平等 ・ 労働力の不当な搾取
政治的領域	民主主義 (Democracy)	・ 主権在民 ・ 平等権の保障 ・ 抑圧からの自由 ・ 参政権の保障	・ ポピュリズム ・ 権利の乱用 ・ 規範の劣化 ・ 煽動の横行
文化的領域	人間主義 (Humanism)	・ 学術の向上 ・ 芸術の振興 ・ 文化の発展 ・ 人権意識の向上	・ 能力差別 ・ 価値の偏向 ・ 文化による差別 ・ 人知への過信

歴史研究

「近代」というシナプス

知見や感性を豊かにしました。その精神作用の表現は、科学や文化の発展を促し、自由を享受できる環境を作りました。一方、文化レベルの設定によって、ランク付けなどの規範が作られ、対立や差別を生みました。文化力への過信が、価値観の偏向を招いています。

「近代革命」がもたらした負の側面は、有害物質の生成、大気汚染、エネルギー資源の危機、陸海空の兵器増強、市民の大量殺戮、大量消費社会、大量情報社会、浮動する経済など、多面的に表れています。

特に「技術的領域」の変化は、制御を超える段階に入っています。プログラムの暴走のような連鎖、放射性物質の暴走反応のような連鎖、温暖化のような自然現象の累乗的連鎖は、すでに私たちの目の前にあります。この暴走反応を起こすスイッチが、どんな形で入っても不思議のない状態に、「近代文明」は至っているのです。

●東アジアの「近代」の枠組み

東

アジアの同時代史は、ヨーロッパとは異質な面があります。相互の接触は、時代によって密度が異なるため、ヨーロッパ史の枠組みとは別に、次のような括りを設けました。

① 海洋開拓交易期 (Stage of Commerces by oceanic pioneers) = 15 世紀～16 世紀

15 世紀の鄭和による新航路開拓など、東アジア側から、海洋開拓の動きがあった時代です。続く 16 世紀は、「倭寇」の暗躍を伴う東アジア的海洋貿易時代でした。海洋上でのヨーロッパ人との接触で、自由貿易的な交易が活発化しました。経済史的に見ると、東アジア的「近代」が動き始めていました。

日本では、鉄砲やキリスト教が伝来した戦国時代末期に対応しています。鉄砲は、「近

代化現象 (Appearance of Modernization)」の一つです。九州諸侯の遣使使節、支倉常長の太平洋横断、日本産銀の中国市場への流入など、ポルトガル・スペインを介した世界化の動きが、現れていた時代です。

② 相互海禁 (鎖国) 期 (Stage of Mutual isolation policies) = 16 世紀後半～18 世紀

16 世紀の明朝の海禁政策に始まり、続く清朝、日本、朝鮮王朝が、相互に海禁 (鎖国) 政策をとり、ヨーロッパ人を含む隣国との交易を制限した時代です。

これまでの定説では、この政策で東アジアは、ヨーロッパに遅れを取ったとされて来ました。しかし、近年では、世界史上で初の制度的な「出入国管理 (Immigration control)」として、歴史的価値が見直されています。出入国の網目をどの程度にするかは、まさに「近代」の問題です。

この時代の東アジアは、ヨーロッパの慢性的な戦争状態とは対照的に、平和共存を図ろうとしました。朱子学に基礎を置いた儒教政治や、「武士道」のような道教的思想形態が定着して行く時代です。

③ 帝国主義交易期 (Stage of Imperialistic commerces) = 19 世紀～20 世紀前半

19 世紀に入り、イギリス、フランス、ロシアを中心にした勢力が、アジア侵略を推し進めました。東アジア的秩序が崩れて行く時代です。これにより、清朝は弱体化し、日本は「開国」を迫られました。日本の明治維新は、東アジアにおける西欧化の先駆けです。中国では、辛亥革命後も、内乱状態が続きました。主導権は欧米諸国が握り、世界各地の領土争奪戦に、東アジアも巻き込まれて行く時代です。「近代文明＝ヨーロッパ文明」の色彩が濃くなりました。

この期間のヨーロッパ各国の野心は、基本的には「自由貿易 (free trade)」による利権

歴史研究

「近代」というシナプス

拡張でした。そこに価格競争と景気の浮沈を招くリスクがあることは、すでに知られていました。しかし、「交易制限（鎖国）」による閉鎖的秩序は、結果的に世界観を小さなものにし、国際競争力に劣る社会構造を作っていたため、対抗するのは困難でした。アジア産品が、安価でヨーロッパ市場に出回り、一部の階層だけが恩恵に預かる境遇に、ほぼアジア全域が置かれた時代です。

④ グローバル市場交易期（Stage of Global market commerces）＝20 世紀後半～

第二次大戦後、ほとんどの国が欧米的価値観に基づく国づくりを進めました。アジア・アフリカ諸国の独立が、相次いだ時代です。冷戦の時代を経て、20 世紀第 4 四半期からは、中国が改革開放政策を打ち出し、ソ連邦の崩壊もあって、「市場原理主義（Market fundamentalism）」が、全世界に波及しました。アラブ世界を含め、多極的なグローバル化が世界規模で広がりました。

●「近代革命」とジェンダー

女

性と「近代革命の連鎖」との関係は、研究が進んでいる分野とは言えません。女性の関わりによる変革（例えば各国の女王時代等）と受動的な役割の変化（例えば家内労働や工場労働、流行等）は、一括りでは論じられません。

しかし、女性と「近代革命」は、陰陽をもちながら関わり合ったことは確かです。政治的領域では、イギリスのエリザベス 1 世期（Epoch of Queen Elizabeth I）やヴィクトリア期（Epoch of Queen Victoria）、オーストリアのマリア・テレジア期（Epoch of Queen Maria Theresia）、中国の西太后期など、各国のあり方を決定づけるほど、影響をもった時代がありました。

また、商業的領域の担い手の半数は、女性と言えます。売り手と買い手の日常的活動を

担いながら、「市場（market）」の盛衰に深く関わったことは、まちがいありません。「貨幣（money）」は、女性的表象の一つと言えます。人口変動も、女性の視点なしには語り得ない要素です。

さらに、文化的領域では、文芸や絵画における「美（beauty）」の形態、男女間の「恋愛（love）」「結婚（marriage）」の形態、家事労働を含む役割（gender role）認識の変化と、時代に応じた様式を生みました。それは、倫理観の変遷と言える「歴史」です。

技術的領域では、女性のための服飾繊維技術（fashion）など、多様な技術革新活動があったことは良く知られています。

このような多様な領域を解明し、それを記述して行く作業は、私たちの手に余る要素が多いと言えます。ただ、「近代」の枠組みの中で、変遷の大枠を提示することはできるかもしれません。

① 人口漸増期（16 世紀～18 世紀）

基本的には、世界的な人口増加と拡散が、顕著になる時代です。大半の女性の地位は低く、貧しい生活の中で、「貨幣」の影響が強まって行きます。

② 人口拡張期（19 世紀）

人口が拡張の一途をたどり、女性たちが待遇改善や女性としての権利を、「男性社会（Men's society）」に対して主張し始める時代です。

③ 人口爆発期（20 世紀～）

いわゆるフェミニズム（Feminism）の台頭に伴って、女性の権利や主張の社会化が進んだ時代です。「近代革命」がもたらした最も重大な状態として、世界人口の爆発的な増加が、地球上の生態系や資源に関わる人類的問題になっています。

以上のフレームは、必ずしも適正とは言えません。ただ、「近代革命と女性」という括りは、近代史を語る上で不可欠なのです。

歴史研究

「近代」というシナプス

●「近代」期の気象変化

自 然環境の変化は、「近代」期にも起こりました。局所的な現象から広域的な現象、短期的な現象から長期的な現象と、その現れ方は多岐にわたります。

ここで取り上げるのは、各時代に起こった個別の自然現象（natural appearances）ではありません。「近代」の枠組みを考える上で、各自然現象（災害等）の前に、フレームワークとして気象変化を考えます。

地球の過去の気象状態は、太陽物理学の見地からの研究が進み、一定の精度で推測できるようになっています。歴史記録や樹木分析との照合などから、少なくともユーラシア大陸とその周辺の気象変化は、大枠が固まる知

見になっています。

それによると、8世紀から13世紀初頭まで（中世）の地球は、太陽活動が活発だったと推測され、温暖な気候が続いたと考えられています。その後、13世紀末から太陽活動が低下し、19世紀中頃まで続いたとされています。地球全体が寒冷化していたと推測されるこの約600年間は、「小氷期（Little Ice Age）」と呼ばれています。そして、19世紀後半以降、地球の気温は上昇傾向に転じたとされ、「温暖化（Global warming）」が環境的な課題と認識されています。

この論考が対象としている「近代」期は、15世紀中頃から19世紀中頃までの約400年間で「小氷期」、その後の現在までの約200年間で「温暖期」になります。

「小氷期」には、寒冷化の度合いが大きかった時期が数回あり、下記の年代だったとされています。

- ① ウォルフ極小期（Wolf Minimum）
1282年～1342年（約60年間）。中世末期にあたる。
- ② シュペーラー極小期（Sporer Minimum）
1416年～1534年（約120年間と長い）。ルネサンス、大航海時代、中国の明代、日本の室町時代（「近代」の始まり）。
- ③ マウンダー極小期（Maunder Minimum）
1645～1715年（約70年間）。「停滞の17世紀（17世紀の危機）」と呼ばれる。ロンドンのテムズ川氷結が有名。
- ④ ダルトン極小期（Dalton Minimum）
1800年～1824年（約25年間）。フランス革命、産業革命等。

気象変動は「歴史」にとって、その展開条件の一つではあっても、絶対条件ではありません。しかし、その変動が人々に及ぼした影響（災害、生態環境の変化、飢饉、資源活用等）がある以上、「歴史」を動かす環境条件として、視野に入れておく必要があります。

ことばの定義

■自然（Nature）

「自然」は、「生まれながらに存在するもの」の意味で、通常は「ヒト（Human）」を含みます。「自然権（Natural right）」は、ヒトを「自然」の一部とすることで成立します。

しかし、ヒトは、ヒト自身を「自然」から囲い込む（enclose）生活様式を築くことで、身の安全を守ろうとして来ました。「文明（civilization）」は、その囲い込み形態を示すことばという側面を持っています。そのため、ヒトから見た客体認識を示す「自然（地球環境やその変化、または生物の野生状態）」は、言語自己矛盾の概念になるのです。ヒトは、「自然」の一部だが、ヒトと「自然」は異なるという矛盾です。

この矛盾を克服するため、ヒトは、客体としての「自然」を、「コスモス」と位置づけ、ヒト自身の宇宙に組み込みました。

ここでは「自然」を、「ヒトを含む生身の姿」と定義します。その定義には、所有と領有の概念を含みません。客体化のケースでは、「自然環境」「自然災害」のような熟語表現を用いることにします。

歴史研究

「近代」というシナプス

ことばの定義

■革命 (Revolution)

日本語の「革命」は、主に政治的領域の「逆転」をイメージする用語として、使用されて来ました。冷戦時代（1945～89）には、自由主義陣営の政治体制に対して、社会主義（共産主義）を標榜する政治勢力の政権奪取を指す意味合いが強くなりました。

“revolution”の語源とされるラテン語の“revolvō”は、「(後ろに) 転がる」と訳されています。付随して、「元に戻す」「(過去を) 思い返す」「回転する」などの訳語があてられています。「後ろ向き (逆) 回転」のイメージと言えます。

ここでは、「革命」を政治的領域に限定せず、幅広い領域の「転換 (changing)」を意味する用語として使用します。後ろ向きか前向きかは、あえて問わないこととします。

■文明 (Civilization)

「文明」は、福沢諭吉による“civilization”の翻訳語です。語源は、ラテン語の“civīlis (英語の civil)”にあるとされ、「市民の」「市民にふさわしい (礼儀正しい)」などの訳語があてられています。市民権 (civil right) を持つ「市民」に関わる都市的な概念です。

ここでは、都市的要素が生んだ事象や現象を、基本的には「文明」とします。農村的要素が生んだ事象や現象を、基本的には「文化 (culture)」とします。「文化」は「文明」の一部ではなく、重複領域のある別の概念で、知的領域の耕し (culture) を含みます。

【出典及び参考文献】

- ・歴史学研究会編『世界史年表 第2版』(2001年12月、岩波書店)
- ・日本歴史大辞典編集委員会編『日本史年表 増補新版第1刷』(1984年10月、河出書房新社)
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』(1972年、山川出版社)
- ・村川堅太郎ほか著『世界史地図』(1983年3月、第23刷、山川出版社)
- ・野村正七ほか編著『世界地図帳』(1985年1月、第7刷、昭文社)
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』(1977年、研究社)
- ・水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』(2009年3月、研究社)
- ・アーノルド・トインビー著、長谷川松治訳『歴史の研究1』(1991年8月、社会思想社)
- ・E・H・カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』(1982年9月、岩波新書)
- ・カール・マルクス著、古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』(1984年2月、岩波文庫)
- ・O・シュペングラー著、村松正俊訳『西洋の没落 世界史の形態学の素描 [第一巻]形態と現実と』(1992年2月、五月書房)
- ・クロード・レヴィ=ストロース著、大橋保夫訳『野生の思考』(1982年12月、みすず書房)
- ・フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 日常性の構造1～2』(1985年11月～1986年3月、第2刷、みすず書房)
- ・阿部謹也著「ヨーロッパ・原点への旅—時間・空間・モノ—」(『社会史研究』創刊号、1982年10月、日本エディタースクール出版部)
- ・荒野泰典著「「四つの口」と長崎貿易—近世日本の国際関係再考のために—」(2012年7月、『東アジアの中の日本の歴史—中世・近世編—』第4回、公益財団法人ニッポンドットコム) <https://www.nippon.com/ja/features/c00104/>
- ・柴田三千雄ほか編『シリーズ世界史への問い1 歴史における自然』(1989年12月、岩波書店)
- ・山川修治著「小氷期の自然災害と気候変動」(1993年4月、『地学雑誌』102巻2号、東京地学協会)
- ・上村恒仁ほか著「シュペーラー極小期における太陽活動研究—一年輪中 C¹⁴ 濃度測定—」(名古屋大学太陽地球環境研究所)
- ・宮原ひろ子著「マウンダー極小期」(日本気象学会機関誌『天気』58巻1号「新用語解説」、2011年)
- ・宮原ひろ子著「中世の温暖期と近世の小氷期における太陽活動と気候変動—樹木年輪中の炭素同位体の分析から—」(講演資料、東京大学宇宙線研究所)

「近代」というシナプス ～連鎖する「近代革命」～

次 章 予 告

第2章 「近代」の始まり

◆始まるためのユーラシア的条件

すべてはモンゴル帝国に始まる

「神の国」の現実

同時代の日本の状況

「都市」と「農村」

◆ローマの落日 神々からの伝言

都市への回路Ⅰ

都市への回路Ⅱ

占星術から天文学へ

「聖愛」と「俗愛」

失われた肉食

閉じられた15世紀

ほか

シンキング・バーズ新書

「近代」というシナプス
～連鎖する「近代革命」～

2019 年 4 月 15 日（改訂 2 版）発行

著 者：シンキング・バーズ
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バーズ**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田 1 0 5 番 5 号

電話／F A X 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表、グラフを含めてシンキング・バーズ及び当該著作権者に帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。